テレビ番組の中に聞く「戦争」の音風景

兼　古　勝　史

はじめに

戦後65年を経た今日、「戦争」や「戦場」そのものを実際に体験した世代の数が急速に減少しつつあるという危機感の中で、戦争の記憶を今一度振り返り、次代や後世に残し伝えていこうとする取り組みが、市民や公的機関、あるいはメディアなど多様なレベルで行われている。中でもテレビが伝える戦争の記憶は、その映像と音響とによって、見るものに、戦争の姿をあらためて刻印し、記憶を再生産してゆく。ある意味テレビのおかげで、私たちは、それが、自分自身の直接体験していない戦争――今や多くの人々にとって第二次世界大戦・太平洋戦争はそうであるし、ほとんどの日本人にとって世界中で今も繰り返される紛争や戦争もまたそうである――であっても、何がしかの視聴覚的イメージを伴って思い浮かべることができる。そうした映像や音響は、言語化され、意味づけされたものとしてではなく、視聴覚的な「体験」として、個々のテレビ番組の中での位置づけとは別に、私たちの記憶の中に沈殿していくものであるともいえよう。

ところで、テレビを通じて伝えられる戦争のシーンにはいったいどのような音が存在しているのだろうか。テレビ番組、特にドキュメンタリーなどにおいて、戦争のシーンには、しばしば、当時の記録フィルムや写真などが多用されるが、もともとこれらの映像には、必ずしも撮影された現場の音声が伴っているわけではない。また、ハイテク戦争といわれる現代の戦争の映像なども実は攻撃する側からの遠隔操作によって録画された映像であり、現場の音をリアルに伝えるものではないことが多い。このように考えてみると、戦争の現場を伝える視覚的な資料に比較して戦争の生の音の記録はそれほど残っていないということに気がつく。テレビで放送される戦争の音の多くは、いわば「後付け」され、加えられたものが多いのだ。だが実際にテレビの番組を視聴する際、私たちは、映像と音声とをそれほど峻別して見ているわけではない。映像と音とが渾然一体となったひとつの擬似的な「体験」としてテレビを視聴しているといえる。こうした体験の蓄積によって、私たちの中にある意味戦争の記憶やイメージが再生産されていくものだとするならば、私たちは、映像の印象の影に薄れ普段あまり意識することの少ない、テレビが伝えている音の問題について、今少し注目し、その実態を省みる必要もあるのではないだろうか。こうした問題意識から、テレビの伝える「戦争」について、聴覚的な視点でアプローチし、現状を把握し、その意味を探る試みが本稿のささやかな目的である。

2. 戦後60年目の「テレビと戦争に関する研究」

戦後60年の節目となった2005年には、テレビと戦争についての研究や出版が数多くなされた[1)]。また、新聞・テレビをはじめとするメディアにおいても、色々な特集や特別番組が組まれた。とりわけテレビ放送において、60回目の終戦記念日

番組名	放送日時
被爆60年企画『被爆者 命の記録～放射線と闘う人々の60年～』	2005年8月 6 日(土)午後9時～10時13分
終戦60年企画『ZONE・核と人間』	2005年8月 7 日(日)午後9時～10時14分
終戦60年企画『追跡 核の闇市場は～放置された巨大ネットワーク～』	2005年8月 8 日(月)午後9時05分～9時57分
被爆60年企画『赤い背中～原爆を背負い続けた60年～』	2005年8月 9 日(火)午後9時～9時52分
終戦60年企画『コソボ・隣人たちの戦争“憎しみ通り”の6年	2005年8月10日(水)午後9時～9時58分
終戦60年企画『そして日本は焦土となった～都市爆撃の真実～』	2005年8月11日(木)午後9時～9時58分
終戦60年関連企画　ドラマ『象列車がやってきた』	2005年8月12日(金)午後7時30分～8時44分
終戦60年企画『靖国神社～占領下の知らざれる攻防～』	2005年8月13日(土)午後9時15分～10時13分
終戦60年企画『戦後60年靖国問題を考える』	2005年8月14日(日)午後9時～10時45分

（表1　2005年　被爆の日～終戦記念日の前日までに放送されたNHKスペシャル）

を迎える8月には、在京キー局だけでなく地方局、ケーブルテレビにいたるまで数多くの特別番組が放送されたことは記憶に新しい。中でもNHKは、広島被爆の日の8月6日から終戦の日の前日14日にかけて9日間連続で、ゴールデンタイムにNHKスペシャル「被爆60年」「終戦60年」企画として、集中的に「核」「戦争」をテーマとした番組を放送した[2)]。（表1）

本研究はこのときに放送された一連の番組を対象とするものである。その後も、毎年終戦の日の前後には、NHK、民放を問わず様々な特別番組が組まれている。だが、2005年という年が、戦後60年＝還暦という節目の年であったがゆえに、「戦争と記憶」という課題がメディアにおいても強く自覚されたことを思えば、このとき放送された番組を今一度振り返る意義は少なからずあると思う。

3. 研究の概要

本研究は、戦後60年の節目の2005年8月6日から14日にNHK（地上波総合放送）で放送された「戦争」「核」をテーマとしたドキュメンタリー番組（一部ドラマ形式のものを含む）を主な対象として、番組中の「戦争」を描写していると思われる場面（実際の戦争や戦闘のシーン、およびそれを連想させる象徴的な描写、記録映像・写真、開戦・会戦・空襲・核爆発・被爆・終戦・占領・焦土などの場面、戦争を伝える記録・文学・絵画等、軍隊や軍事基地など）を抽出し、そこにどのような現場音や効果音等が用いられ、表現されているかという点に絞って比較検討をし考察したものである。その際「何が表現されているか」といったことだけでなく「何が表現されていないか」にも留意し、「無音」=「沈黙や静寂」なども音の表現の重要な要素として注目した。

いわゆる「音楽」の使用・BGMの内容・選曲に関しては、そのこと自体、番組表現上の重要な要素であり、番組の聴覚的側面に大きな比重を占めるものではあるが、今回は原則として、考察の対象から外した。それは「音楽」それ自体があまりに大きなテーマであり、別の機会に、ひとつのテーマとして取り組んだほうがよいと考えたからである。敢えて、「音楽」を原則的に対象外とすることで、これまであまり注目されることの少なかった、効果音・現場音・沈黙といった番組の聴覚的諸要素に光をあて、そこに潜む表現上の手法やスタイル、メッセージ、音の文化などについて明らかにしたいと考えた。

4.「戦争」を表現する音

調査の対象とした番組中「戦争」を具体的に表現していると考えられるシーンは合計で99箇所あった。これらのシーンで実際に流されていた音の要素を抽出・比較・検討した。全番組を通じて「戦争」を表現しているシーンで使われていた音を、頻度の多い順に整理すると、「戦闘機・爆撃機等のエンジン音」がもっとも多く、ついで「爆弾・砲弾などの爆発音」「原子爆弾・核爆発」「火災・爆風」「爆弾落下風切音」の順となる。（表2）

戦闘機・爆撃機等のエンジン音	17ヶ所
爆発音（爆弾・砲弾など）	15ヶ所
原子爆弾・核爆発の音	7ヶ所
爆風・空襲等による火災の音	6ヶ所
爆弾落下の風切音	4ヶ所

（表2　番組中に多く見られた「戦争を表現する音」）

番組のテーマや編集された映像の内容によってこれらの音の種類や頻度は大きく影響を受けるであろうが、少なくとも視聴者が体験する「戦争の音」として「戦闘機・爆撃機のエンジン音」が、大きな比重を占めていることがわかった。第2次世界大戦が、兵士だけの戦場での戦いではなく、広く市民を巻き込んだ総力戦であり、戦争体験の記憶として銃撃戦や砲弾よりも「空襲の恐怖」というものが相当な大きさで共有・刻印されているということなど、戦争の記憶の核心がどこにあったかということを考える意味でも示唆的である。

このほか、映像に対応する具体音・効果音のない箇所（音楽やナレーションがついている）や沈黙で表現されているシーンが20箇所以上存在していることなどがわかった。

5.「隠されている音」について

戦争番組の映像を注意深く見ていくと、そこに本来あるはずの音が、聞こえていない場合がしばしばあることに気がつく。そこには他の効果音・ナレーション、あるいは音楽などが被せられていることが多いので、一見しただけでは見落としてしまうが、聴覚的想像力を働かせて注意深く映像を見てゆくと「何の音がないのか」が見えてくる。そうした「表現されなかった音」にはある種の特徴・傾向があることが感られる。（表3）

これらの場面は必ずしも「無音」というわけではない、むしろ多くの場合、戦争や戦場を俯瞰した爆撃音や砲弾音、火災の音、あるいは音楽・ナレーションなどが聞かれる。しかしながら、本来ならばそこに同時に存在するはずの音、即ち市民の断末魔の叫び声や阿鼻叫喚の悲鳴・怒号、うめき声、銃弾に撃たれる音、被災市民の苦しむ声、死体を前に泣き叫ぶ声など、戦争体験の生々しい現場の響きが聞かれないのである。

上記の事例から見えてくること、それは、もっとも悲惨で残酷なシーンには、その現場を伝える音がないということだ。第二次世界大戦当時の記録映像には音声が伴わないものも多く、番組化にあたって、止むを得ず対応する現場音を当てなかったものもあるだろう。演出上の問題から、短いカットに逐一音を対比させるよりは、シークエンス全体を通して一定時間聞いて違和感のない空爆音などを重ねたほうが聞きやすいという編集上の判断もあるのだろう。だが、制作者や送り手の意図の有無はともかくとして、戦争被害の生々しい現場の記憶、個々の被災者や兵士の体験した等身大の記憶…ともいうべき音が、番組の中から結果的に排除されていることに我々は無自覚であってはいけない。「戦争」とは、「見えるべきものを見えなくする」「俯瞰的視線を大量に生み出す現場」（坪井秀人2005：69）だからである。（「死」を連想させる、残酷で不快な音声の排除という意味では、もちろん放送コードとの関連も考慮する必要があるかもしれない。しかし、同じシーンの映像は認められても、それに伴う音声は積極的に流さないというところに、テレビ放送・戦争番組にお

『象列車がやってきた』
（24：30）ガダルカナル島での戦闘　浜辺に散乱する日本兵戦死体
『ZONE・核と人間』
（ 8 ：18）被爆後の広島・人々の様子
（23：45）映画～『広島・長崎 1945 年 8 月』～被爆者の治療などの様子
『そして日本は焦土となった』
（12：50）ドレスデン空襲　逃げ惑う人々、消火作業、瓦礫と貸した街
（15：55）1937 年ゲルニカ空襲　埋もれた人を助け出す・負傷した子供を運ぶ市民
（16：22）1937 年日本軍による重慶爆撃　燃え盛る市街と市民
（26：04）ハンブルグ路上の焼け焦げた死体の映像
（31：30）負傷して担架に乗せられる日本人
（49：10）東京大空襲後の本所・赤坂の死体の山
（56：36）第二次世界大戦後　様々な空襲で犠牲になった市民の映像（泣き叫ぶ市民、病院のベッドに横たわる瀕死の子供、焼け焦げた死体と頭を抱えて悲しむ市民）
『赤い背中～原爆を背負い続けた 60 年～』
（11：32）アメリカ戦略爆撃調査団撮影　被爆後の長崎　被爆者たちの映像
（呆然と乳をあげる母親と子、ベッドで苦しむ被爆者、焼け爛れた背中を治療される谷口少年）
『靖国神社～占領下の知られざる攻防～』
（ 3 ：15）兵士たちの戦死体の散乱する戦場
（ 3 ：26）負傷して担架で運ばれる米兵
『戦後 60 年　靖国問題を考える』
（ 4 ：47）昭和 19 年映画『輝く靖国物語』より戦闘シーン　撃たれる　一面の死体
（17：17）沖縄戦～地上戦　火炎放射器　防空壕に手榴弾
爆発　民家を焼く　民間人おびえて投降
（27：30）フィリピンマニラ　虐殺された人々　捕虜収容所
（35：07）ニューギニア戦線　ジャングルの行軍

（表 3　あるべき音が聞かれないシーン）

ける暗黙の「音」の不文律があるようにも思えるのである。）

逆にそのような生々しい現場音を敢えて排除しなかった希少な表現例としては、アメリカの「同時多発テロ」（『追跡・核の闇市場』46：50＝同時多発テロ時の世界貿易センタービル地上付近での大混乱の様子）や「コソボ紛争」（『コソボ：隣人たちの戦争』0：15＝アルバニア系住民を弾圧する政府軍・民衆の声・銃撃・死体）などのシーンが認められた。こうしたところに音に対する「無意識の選択」があるのかないのか、今後更なる調査検討が必要だろう。

6. 沈黙の表現するもの

「隠されている音」とある意味通じるが、より積極的な表現として「沈黙」がある。これは、そこにあるべき音が何らかの事情で聞かれなかったり、別の音があてられているということではなく、もう一歩進んで、積極的に「音のない状態」を表現として利用していると思われる場面である。視覚的なブラック・アウト＝暗転ならぬ音の暗転ともいえるこうした表現方法は、映画やドラマにおいて、登場人物の心の衝撃・内面への感情移入などを表す際にしばしば用いられる手法だが、戦争を伝える番組においては、こうした手法とは別の意味で用いらている。沈黙が多用されているのは、具体的には、例えば「死体や死」に関連するシー

（沈黙の時間的な長短ではなく「沈黙を感じさせる」場面という観点で抽出したもの、沈黙時間が4秒程度の短いものもある）

――死体・死に関連するもの
『そして日本は焦土となった』
（26：04）ハンブルク空爆；前の空爆のカットの爆音の余韻が残るが、ハンブルグ空襲被害者の死体のシーンのはじめに音はない。やがてナレーション、そして音楽が入ってくる。
『靖国神社～占領下の知られざる攻防～』
（47：46）アッツ島玉砕の写真　4秒間の沈黙のあとナレーション　音楽・効果音なし。

――核爆発・原爆・被爆に関するもの
『ZONE・核と人間』
（24：38）1952年原爆に関するコード解除後写真誌で公開された原爆被害の実態。約4秒間の沈黙のあとナレーションが入るが、その他・効果音・音楽はない。
（前のカットの音楽が消え沈黙が強調される）
『被爆者 命の記録～放射線と闘う人々の60年～』
（18：57）被爆から一ヵ月後に放射能障害で死亡した伊東宏さん（写真へズーム）。
前のカットからの音楽が消え、ナレーションも消え、4秒間の沈黙が強調されている。
（21：19）伊藤浩さんの弟と父の家、伊東宏さんの写真へズーム「かわいそうだったですよ、ほんとね」という父の言葉の後（21：12）静かな現場音（7秒）、続いて写真を持つ弟のカットに代わって（21：19－）無音6秒の後ナレーション。（計13秒の静寂）
『赤い背中～原爆を背負い続けた60年～』
（8：34）谷口さんの手記にズーム　朗読へ入る前　（8秒間の沈黙）

――靖国・天皇に関する映像
『靖国～占領下の知られざる攻防～』
（9：16）招魂～合祀の説明～戦没者合祀名簿（7秒沈黙）
（9：35）合祀名簿の戦死の文字へズーム ⇒ 天皇参拝の写真（14秒間沈黙）
（27：03）前のカットの宮司の言葉が終わってから戦前の靖国神社の写真（6秒間の沈黙）
（27：21）昭和18年の靖国への天皇参拝の写真～横井権宮司の写真（7秒間沈黙）
（36：34）マッカサー元帥と天皇の2ショット写真へのズーム（4秒沈黙）

※　上記の他、天皇の映像には、ナレーションだけ、あるいはナレーション＋音楽が重なっているが、現場音・効果音＝具体音がない　というものが多い。

（表4　沈黙を表現として用いているシーン）

ンであり、「靖国・天皇」に係わる映像、そして「核爆発・原爆・被爆」に関するものなどである（表4）。

これらのシーンを観ていくと、テレビ放送における沈黙のもうひとつの役割が見えてくる。それは、ある種の峻厳性、厳粛さ、不可侵性、権威、またはそうした感覚の演出であって、視聴者が一定の緊張感や集中力を持って映像に接しなければならないという、フォーマルな感覚、シリアスな視聴態度への要請がそこに含まれている。人は沈黙に出会うとき、自ずと威儀を正す。何か特別な時間が訪れたことを知るのだ。沈黙をもって日常性から非日常性へ、周辺的視聴から集中的視聴への区切りとなす感覚は、実はテレビだけの特殊なことではない。例えば、コンサート・ホールにおける音楽・演劇等の前後の沈黙（拍手はいわば沈黙を際立たせるための音の儀礼と考えたい）、神社や神域での静謐さ、戦没者等への黙祷もそうで

あるし、日本の武術等の試合や道場に入る際の一礼もまた沈黙の演出につながっている、教育現場での起立・礼にも同様の思想が見られる。こうした音の儀礼・聴覚的な文化がテレビ放送にも反映していると見ることができるのではないだろうか。

沈黙がテレビにとっって非日常への入り口になるということは、とりもなおさず、テレビにとって「音のある状態」こそが日常であることの裏返しだともいえる。

7. 核爆発の音

「原子爆弾の爆発」、「核実験」などの音については、前項の、6. 沈黙の表現するもの、で述べたように、核爆発の音が表現されていない例が多い。核爆発のシーンに具体的な爆発音等がついているかどうか調べた結果は表5の通りである。全体の約4割のシーンに具体音・現場音が付けられていないことがわかる。なぜ核爆発には音がつけられないのか。

「核爆発ほどの音を効果音で表現できない」「間近で聞いた人間は生き延びられないため、実際のところわからない」「核爆発の音を聞いて生き延びられるのは、爆心地から数キロ以上離れていた場合であるから、視覚的光景よりも相当程度遅れて鈍い音が長時間にわたって聞かれるのではないかと思われるが、こうした音をリアルに伝えるには、それ相応の時間（尺）が必要となるが、そのようなリアルな表現するだけの十分な尺がない。」「あまりに悲惨すぎて生々しい音をつけられない。」等の理由が想像できる、が…、理由はともかく、実際には、番組の中で核爆発の音が描かれないことによって「核爆発はどんな音でも出すことができる」のだともいえる。爆心地のすさまじい爆発音、声にならない悲鳴、1キロ先で聞く炸裂音と迫りくる爆風の轟音、建物の崩れる音…阿鼻叫喚の叫び声…全身の血の沸騰する音…一瞬で蒸発する人々の消滅音…直後の静寂…。視聴者の想像力によって音のついていない核爆発は無限の音を生み出す。まさに沈黙ほど核爆発の残虐性・

『ZONE・核と人間』
（全6シーン中のすべて音あり　爆裂と同時に音）
『追跡・核の闇市場』
（全1シーンに音あり　パキスタン核実験の現場音　遠い轟音）
『赤い背中～原爆を背負い続けた60年～』
（3箇所中1箇所のみ「爆発音のような音楽」+ 煮えたぎるような効果音あり、他の2箇所は具体音なし）
『そして日本は焦土となった』（全一箇所　具体音なし）
『被爆者　命の記録～放射線と闘う人々の60年～』（全2箇所音なし）

※核爆発のシーンのない番組
『靖国神社～占領下の攻防知られざる攻防～』『戦後60年 靖国問題を考える』

調査対象となった番組9作品のうち5つの作品に核爆発のシーンがあり、
●すべての核爆発のシーンに具体音のあるのが2本
『ZONE・核と人間』『追跡・核の闇市場』
●すべての核爆発シーンに具体音のないものが2本
『そして日本は焦土となった』（全一箇所　具体音なし）
『被爆者　命の記録～放射線と闘う人々の60年～』
●混在している番組が1本『赤い背中～原爆を背負い続けた60年～』

（表5　核爆発シーンにおける現場音・具体音の有無）

犯罪性を告発する音はないといえよう。

具体音が添えられた核爆発の例を見てみると（『ZONE・核と人間』など）、映像上の爆発と同時に強烈な爆発音が聞こえている例が多い。これはいかにも演出的な感じがしてしまう。実際問題として、核爆発を撮影した場所は、爆心地から相当距離の離れた場所でなければならず、その同じ場所で音を聞いたのだとすれば、音速＝約340 m/sであることを思えば、そこで聞かれる音は爆発より数秒以上遅れて聞こえるはずであり、恐らくいつまでも轟音の余韻が伴う鈍い長い音であるはずだ。だが今回対象とした番組の中で、核爆発の音がある場合、それはほとんどの場合、叩き付ける様な破裂音とその後の短い余韻・轟音で表現されている。（例外として、『ZONE・核と人間』でのトリニティ核実験の音（15′06″）が爆発からわずかに1秒程度遅れて音が響く）

このように核爆発は、音がないか、さもなければ、極めて演出的な現実離れした音のどちらかで表現される傾向があり、リアルな現場音が避けられていることがわかった。そこにはどのような意味があるのか、今後の更なる調査を続けて行きたい。

8. 視る×聴く　装置としてのテレビ

2005年8月11日放送の『そして日本は焦土となった』のオープニングは印象的だ。暗転した黒い画面の中で、爆撃機のこもったエンジン音が低く唸りつづく、そこに（コクピットの音声の録音と思われる）爆撃士・航法士らの会話がまるですぐそこにいるかのように飛び込んでくる。（言葉に合わせて日本語訳のテロップが黒い画面の隅に表れる）このことにより、この場面が実は今まさに爆弾を投下しようとするB 29の機内であることが明らかとなる。まだ画面は暗転のままだ。緊迫感の中、会話はさらに続き、爆弾が投下され着弾したらしい様子がはっきりと感じられる。それを喜ぶ搭乗員たちの歓声…。画面が真っ暗なため、視聴者には、いったい声の主がどのような人物なのか、黒人か白人か、どのような顔立ちのどのような年代の人間がそこにいるのかはわからない。が…しかし、会話と音によって、この場で何が行われていたかは明確だ。「空襲」という俯瞰したものの言い方ではとらえきれない、そのさ中にある人間の営み、一人一人の生身の人間が、命令し、狙い、爆弾を投下し、命中して喜ぶ…その等身大の「行為」が、ここではくっきりと浮かび上がってくる。

この番組の制作者は、おそらく、都市への無差別な「空襲」という出来事の“主語”が、B29戦略爆撃機でもなく、米軍によってでも、国家でもない、何よりもこうした一人一人の生身の人間の判断と責任に基づく具体的な行為によって行われたことを告発したかったのに違いない。暗転画面に空襲時の爆撃機内部のリアルな音と会話を再現（実際の録音のようだ）した、その手法はみごとに成功している。このシーンによって、私たちは、空襲が結局は人間によって行われた行為であることを思い知らされるのである。

かように、音は「出来事」であり、「行為」なのである。テレビは戦争の音を伝えることによって戦争が「戦場」や「戦闘機」「機銃」「軍隊」といったモノではなく、人類が行ったコト＝営み、であることを告発する。

「視る」ことは対象との距離感を前提にしている。距離がなければ私たちはものを見ることができない。私たち自身は常に視覚的な景観世界の数歩～はるか手前にいる。だから映像として映されたものに対して、私たちはある種の距離感、冷静さ・無関係さを感じながら対峙することができる。一方、音は本来的に自分を中心に周囲に鳴り響く体験であって、私たちの聴覚は常に鳴り響く音事象の中心にいる。現前の風景と取り巻く音風景。テレビから伝えられるこの2つの世界の位相のずれが実はテレビ体験をより深く立体的なものにしているのだともいえるだろう（ここでは、テレビの音響再生システムによる音場ではなく、音と人

との関係性に注目したい)。テレビが放つ視覚的世界と聴覚的世界の間を行き来し、その2つの異なる距離感のバランスを図ることで、ことで、私たち視聴者はそこに展開される出来事と自身とのかかわり、身の置き所を決めているともいえる。それは固定的なものではなく、テレビが伝える視・聴覚情報の攻めぎあいによって絶えず揺れ動き、変化するものだ。

戦争番組と音の関係を見ていくと、こうした音の視点ならぬ、いわば“聴取点”が文字通り“見えないところで”暗黙のうちに限定されている実態が浮かび上がってくる。こうして聴覚体験の欠落は本来目に見えているはずの視線をも限定することになるのだ。過去の戦争だけはない、イラク戦争などにおいて、テレビモニターを通して我々が体験した、器械が主役であるかのような、ピンポイント空爆の映像、ミサイルに据え付けれられたカメラ＝ミサイル・カムの映像によって「〈見えない〉視線が作り出されてきた」(坪井 2005：69) 経緯も、音の欠落という観点からあらためて考えてみる必要があるのではあるまいか。それはまさにマリタ・スターケンが『アメリカの記憶』で明らかにしたように、戦争を「兵器」と「標的」で語り、「身体を思い出さないようにすること」(Sturken 1996＝2004：222) につながっている。

9. おわりに

私たちは視覚優位で世界を認識している、人間の五感による環境情報収集比率のうち視覚が占める割合が圧倒的に高いといわれる。が、これは、あくまでも世界の認知・情報の入り口の話であり、そうして得られた「認識」が「体験」を経て「記憶」となって沈殿するときには必ずしもこの比率通りにはならないであろうことにも留意したい。

記憶においては、必ずしも視覚が一番であるとはいえない。母に抱かれた感触、安心する匂い、心臓の鼓動、懐かしい味…空襲の音、火災の熱風、焼け焦げる匂い…テレビが世界を知るメディアであると同時に世界を記憶するメディアであって、私たちが何かを共有するためのメディアなのだとすれば、テレビの中で音の果たす役割の重要性は益々考えられなければならないだろう。「戦争」というひとつの時代の深い苦痛の記憶を語り継ぐ番組を通してだからこそ、このような音の役割が見えてきたのだと思う。

注

1) 例えば、桜井均、2005『テレビはどう戦争を描いてきたか』岩波書店、坪井秀人、2005『戦争の記憶をさかのぼる』ちくま新書、あるいは、水島久光・石田英敬・吉見俊哉・小林直毅・原宏之、2006-2008「テレビジョン映像アーカイブ分析と戦後60年の記憶に関する研究」などがあげられる

2) これらの番組はNHKオンライン http://www.nhk.or.jp/ で視聴することができる（2010.12.14）

参考・引用文献

Bruce Cumings, 1992, “War and Television”＝渡辺将人訳, 2004,『戦争とテレビ』みすず書房

Marita Sturken, 1996, “Tangled Memories；theVietnam War, the AIDS Epidemic, and the Politics of Remembering”＝岩崎稔・杉山茂・千田有紀・高橋明史・平山陽洋訳, 2004,『アメリカという記憶－ベトナム戦争, エイズ, 記念碑的表象』

桜井均, 2005,『テレビは戦争をどう描いてきたか』岩波書店

坪井秀人, 2005,『戦争の記憶をさかのぼる』ちくま新書

貴志俊彦, 川島真, 孫安石, 2006『戦争・ラジオ・記憶』勉誠出版

水島久光, 西兼志, 2008,『窓あるいは鏡 ネオTV的日常生活批判』慶応技術大学出版会

水島 久光他, 2009,「テレビジョン映像アーカイブ分析と戦後60年の記憶に関する研究」科学研究費補助金研究成果報告書